

(和歌)

目を閉ちて……………柴 舟…三八  
 南下北上……………賛助員…河崎なつ…三九  
 無題……………賛助員…岡田ひさ…四二  
 題いろく……………四三

紹介

英語に興味を持つ方々へ……………岡田みつ…四九

偶感

偶感……………賛助員…清水俊尾…五九  
 秋が来た……………文科三年…ふたば…六一  
 そらありきて……………文科四年…なにがし…六二

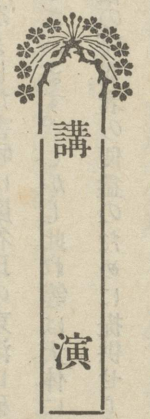
彙報

第廿六回文科学術談話會……………六五  
 第六回會計報告……………六五

交詢

母校だより……………六六  
 卒業してよりの三年と八ヶ月……………賛助員…湯川たさ…七〇

# 文科学術談話會々誌 第七號



## ●日本の傳説に就て

文科二年 川上 上田 横井 山田 倉田

私は日本の傳説に就てお話致します。

傳説とは實際の事實と想像から造り上げられた物とが合して物語となつた物でございます。そして一面には歴史であつて又一面には空想でございます。此處にお話致しますのは日本に於ける傳説を概括的にお話上げやうと思ふのでございます。即ちあるやうな無いやうな夢の様に淡い神秘めいた此の傳説といふものに私共は幼いときからごんなに種々な感情をそゝられたでせう。大きく成つた今でも幼い時に祖父様祖母様から聞いた話を思ひ出しますと疲れきつた現實の心も靜に落付いてしんみりとした穏さと底知れぬ懐しさを感ずるのでございます。

諸外國に在つては既に研究せられた著書も數多く有りまして此の研究の結果が文學上教育上影響し

た處も少く無いのですが我が日本に於ては種々な事情のもとに神話なり傳説なりを研究する事は新らしい企であつて第一材料の集め方も困難で有る爲にあまり今日まで立派に研究せられて居りません。然し最近に置きましては切實な現代思潮に動かされた時代の要求の爲でも有りませうか次第に此の種の問題が一層學者及び國民の興味を惹いて新らしく研究せられる事と成り此れに關する書物も勃々出版界に見えるやうになりました。然し何分にも新らしく着手せられんとする事業で有りしますので私共が調べます時に此の様な方面から此の様な事を彼の様な事と望んで見たのでございますけれども参考資料も誠に少く又凡てに限られて居ります私共の到抵出來得る事ではございませんので缺と針と糸で不器用な手に成つた亂雑な事を申し述べますが大体に於て此れまでの傳説研究の風潮を述べ今後の研究を希望するために此の不完全な材料に基いて成し得るだけの統一をつけて後の研究を期し度いのであります。

私共の今度用ゐました書物は巖谷氏の東洋口碑大全の上巻と五十嵐氏の趣味の傳説と高木氏の日本傳説集とでございます。しかし此れ等は大体に於て學理的に傳説の根本問題に向つての研究でなしに此れから後の研究者の便益のために提供せられた多くの傳説を納めた物でございます。此れ等の著書中高木氏の分類法に基いて先づ各地に分布せられて居る傳説を少しくお話致さうと思ひます。尤時代を經複雜な性質成分を含んで居ります一つの説話が巖正の意味に依つて分類中の一名目にも

どに釘付けにせらるゝといふ事は不可能であると言ふ事は申し上げるまでも無く従つて一傳説が此れ等名目を兼有して區別の判然しない物も多くあります。高木氏は此處に述べます様に傳説を大略二十三に分類せられました。

第一 傳説の説明的神話的傳説と申しますのは自然界の現象と動植物の起源形態其他の事實を説明する神話傳説で或る獨立した特色を除きますと此處に挙げます名目の大部分は此の色彩を帯びて居るのでございます。其の例として一つを挙げますと、伊豆の國下田町の一角北の出口にあたる所に角尖塔形の小山がございます。下田富士といふ名が此の山につけてあります。昔此の山と駿河の富士山とは姉妹でありました。姉なる駿河の富士山は極めて器量がわるかつたのに引き換へ下田の富士山は容姿勝れて美しく優しかつたので姉の富士山は妬の心を起し一生顔を合せまいと誓はれて其れがために天城山の屏風が出來たのであります。其れですから奥伊豆に居ると何處にも駿河の富士山の見える所がありません。其ればかりで無く富士山の怒で奥伊豆の地には今に美人が生れないさうでございます。此れは特に國民神話の性質を明かに示して居ります。

第二 巨人傳説及び兩嶽脊競べ傳説と申しますのは大男を述べましたり巨人の足跡を説きましたもの同じやうな二個の山の説明を目的として巨人を使用したもの足跡の起源を神佛其他の超自然的存在又は類似のものに求められる等種々なる形式のものがござります。兩嶽脊競べの傳説として

は次のやうな話がおびいます。肥後の國熊本市の西に金峯山がございいます。熊本市の東には三四里離れた所に飯田山と言ふ山があります。昔金峰山と飯田山と高さの事から喧嘩をして何時迄議論をして見ても勝負がつかぬから兩方の山の頭から頭へ懸樋を渡して見ようと飯田山の方で言ひ出しました、よからうと言ふので長い懸樋を渡しましたそして水を流しまして見ますと其の水が飯田山の方へ流れましたそこで飯田山は喧嘩に負けて降参して仕舞つて今から左様な事はいひ出さんと言つたさうでございいます今に飯田山の上に池があるのは其の時の水の溜つた跡で有ります飯田山と申しますのはこのお話の節からつけられた名目でございいます。

第三の九十九傳説と申しますのは少しく説明を要しますもので茲に九十九と申しますのは普通の根數でも順數でも無く百と言ふ單位數所謂名數から一を減じた數で或る單位數に一だけ不足した量であります、ですから必しも九十九に限つたわけで無く百九十九でも五百に一つ少い四百九十九でもたゞ九といふ數でもよろしいのでございいます。一体此の不完全單位數は凡ての國民の宗教文學神話傳説に於て或る特殊の意義をもつて居ります。そして最後の一個が常に問題になりて居りますといふやうな型であります。今一息といふ所が思ふ様にならないのであります。

第四 樹木傳説といたしましては大木に關するもの樹木の精靈を言つたもの又英雄若しくは高僧の杖が芽を吹いて大木になつたと言ふ様な者がございいます。

第五 石傳説此れには石が成長するとか繁殖するとか言ふ種々の信仰に基いたものや石の面の様な跡に就て又は化石に關する傳説等があります。

第六 城跡傳説此兩者は多くの場合共通した點がございいます。之等の話にはお金を埋めた話や太陽を扇で招き返したと言ふ様な長者の傲慢な奢侈とか随分な我が儘な振舞を現はしたものが多くあります。そしてお金を埋めると言ふ様な筋の物は多くの場合黄金の對象たる咒咀を伴うて居ります

第七 金鶏咒咀と申しますのは金の鶏によりて咒はれたるため始の凡ての目的を達する事が出来なかつたと言ふ様なものでございいます。

第八 椀貸穴傳説は文字の示す通り膳椀等を貸す穴に關する傳説でありますが此の様な恩惠は必人間の過失罪惡破戒によりて消滅する事に成つて居ります。

第九 抜け穴傳説には此處、相模の國は圓澤山に近い愛川村といふ山の中の部落に鹽川瀧と言つて高さ廿丈ばかりの瀧がありますそして此の瀧の直ぐ上に江の島淵と言つて深さの知れぬ淵がある土地のものは此の淵は江の島の辨天の巖窟に續いて居ると云ふて居ります昔此の村の樵夫が此の淵の傍で辨當をすまして水を飲まうとして辨當箱を取り落した事があります其れから間もなく江の島に參詣した所が其處の岩窟に其の辨當箱があつたさうだ鹽川瀧には天狗が住んで居て瀧の下へ行つて大きい聲を出すものがあると天狗が腹を立て、水を多くするとか言ふ事で瀧を見に行くものが試し

て見るさうでございませうが果して水が多くなつたかどうかま聞だいて見ませんと言ひます。此の様に一地點の穴が他の方と通じて居るといふ意味なのであります。

第十 沈鐘傳説と申しますのは沈んだものが水面から見えたり或る條件の下に浮き上つて來ると言ふ少し複雑なもので沈んだ原因は多くの場合一種の罪惡罪過咒咀にあります。そして鐘以外に沈んだものも其の性質が同一であるものは皆此の中に含まれて居ります。又特に沈没の動機は前と異つて水神の美望其他の意味に基くと言ふやうなものもありません。

第十一 水界神話的傳説とは河や池や沼や湖に關した傳説でありまして人間が蛇となつて主となつたり人が沼になつたりする傳説が多くございませう。河童が用ひられて居るものもありません。例として「鳴かずの池」のことをお話いたします。太田の金山の邊には歴史上の遺跡か澤山あります。随つて丘の蔭に祀られた社や杉や檜に圍まれた山間の池沼などには様々の神祕な傳説がをさめられて居ます。而し金山の麓一帶の人民が歸依崇仰の中心となつて居る大光院の開祖吞龍上人につきましては殆どこれといふ傳説がありません。茲にお話いたしますのは上人の事蹟として稀に聞き得たもので或は上人に關する唯一の傳説であるかも知れませう。金山には今でこそ美しい稻妻形の道が縦横に光つて居ますが二百五十年前の古は草茫茫たる武藏野の果に只松の樹と熊笹とかけりあつて居る山里でありました。徳川初代の威光がはやくも此僻地に及んで榮華を誇る三葉の葵紋所がこの山奥の寺

院の麓にもかゝりやいて居たとはいへ廢墟のかげを印した新田氏の城跡にはたゞ松籟のさひしく古をさゝやいて居るのみでございませう。丁度其の頃の事でありませう。金山の山腹の貧しい茅舎に與一といふ男が住んで居りました。彼は獵夫を渡世として隆々たる双の腕に生活して居ました。

手馴れた投繩と手斧とを腰に附て疲れては谷の泉に憩ひ倦んでは澄んだ聲で好きな鄙歌を歌ひつゝ松の幹に紫色の朝日影さす頃から懸崖の岩の壁に夕映の残る頃まで谷から谷峯から峯と駆け廻る之が彼の日々の仕事でありました。そして彼は斯様な仕事に衷心から満足して幸福なる生活を送つて居りました。況んや彼には相愛の妻もあり慈悲深き老母もありました。そして夕毎にこの戀しい二人に歸りを待たるゝ身でありました。彼れは何も思ふ事がなかつたのでありませう。斯て單純でしかも充實した生活が續きました。或夏の一日數日來の暗澹たる天候が未曾有の大暴風雨をもたらして山は崩れる雨はあふれる木は折れる家は飛ぶ恐ろしい騒ぎを演じましたが幸にして與一の家には大した被害もなく二三日の後には大暴の後の物憂い沈靜の中に再び丈夫な顔を揃へることが出来ましたけれども之が爲に彼等の被つた間接の被害は容易なものではございませうでした。大荒れのために山の様子が一變してその爲に日々の獲物か非常に少くなりました。かくて秋の末に至つて與一の一家は別に生活の道を求めねばならぬやうになりました。相談の結果與一が暫く遠方へ出稼きに行くことになりました。一家か揃つて住所をかへるには金山の天地か餘りに馴染深かつたのでございませう。

松を残して草木の一樣に黄色にうら枯れた秋の朝與一は遂に旅立ちました。女房は高山のはつれ金山の盡きる所まで與一を見送りました。彼等は松の樹かげに立つて暫の別れを惜しみました。淡い秋の日影を浴びて松は音もなくしだれて居まして遙かの森影に與一の姿か消えるまで與一の妻は松の幹に立ちつくしました。草叢にすく虫のすゝりなきは彼女を深い哀愁へ引張りました。與一居ない一月を何になくさめられて日を送らう彼女はふと家に残る老母を思つた同時に大なる責任を自覺しました。彼女は小走りに家にかへりました茅舎には老母が佗しく居つて待ました。そして何か大きなものを落したやうな淋しさか二人にありました與一の妻は薪を拾つたり谷川に水を汲んだりして甲斐々々しく待つ日の第一日を送りました。夜は老母を慰めつゝ遙かに與一の姿を偲びました。翌日からは暇ある毎に山地を獵り歩きました。なるべく蓄へた糧食に手をつけまいと思つたからであります。彼女は與一を想ふ度に遙かに越後の連山を望んで歌ひました。

私やネーエなかのりさんわたしや太田の

何チャラホイ金山育ちヨイ／＼／＼

外にやチーエなかのりさん外にやまはない

何チャラホイまつはかりヨイ／＼／＼

待つ人の澄んだ聲は松の樹の間をひびきわたりました。やかてその聲がかすかに谷間に吸ひ込まれて行きますと彼女は恍惚として自らの聲の行方を追ひそして自ら慰めました。或時は灰色に朽ちた

石垣を力なき夕陽の光の照す時に此歌を歌ひました或時は夕靄にこめられた雑木の中からごことも知れず此歌がひびきました。かうして彼女と老母との一日一日は佗びしいなからに忘れるやうに過ぎました。漸く彼等の待ち焦れた一月はたちました。けれども與一は歸りませんでした。晩秋は名残を告げんとして越後堺の山々には白い物が積まれて來ました。又半月待ちました。けれども待人は遂に歸りませんでした。老母を慰めかねて彼女は平原に臨んだ丘へ來ては「私やネーエ」を歌ひました。然し歸るものは其歌の聲の反響に過ぎませんでした。歸らぬ人を待つ苦痛は直ちに飢渴の苦痛でありました。貯へた糧食は既に盡きて二人の口を満足せしむべき糧は到底女一人の腕の生み出し得る所ではありません。そのみか彼女の一人の老母は「與一與一」と叫びながら遂に病の床につきました。飢渴と病魔の黒い手とは交々この茅舎を襲ひました。秋風は冷やかさを加へてすゝり啼く虫の聲は絶え／＼に茅舎の前に聞えます。與一の妻の口からはも早や「私やネーエ」の悲愁を含んだ歌を聞く事が出来ませんでした。看病の疲れと糧を得る努力とは再び彼の女の口を開かせなかつたのであります。

或日與一の妻は糧を得んがために與一が秘藏の小銃を肩にして山に出ました生活の疲れに茫となつて徒らに亂雑な幻影におはれつゝ谷間谷間を涉つて歩く中に日は何時しか赤城の頂に入らうとして茫々たる武藏野の大平野に薄墨色にぼけて居ました。彼女の手にはまだ半伯の獲物もありません。そして歸る家には病且飢ゑた老母があります。彼女は慄然として我に歸つて見れば此處は大光院の

裏山で松の老木が壁の如くむらがり立つた間を夕靄が音もなく流れで居ます。與一！與一！彼女は堪へがたさに唄ひました「私やネーエ……………」と、けれども彼女の聲は以前の澄んだ響を持つて居ませんでした。彼女の心は愛にみだれて茫として空虚なる耳には只草間にすたく虫の聲のみ聞え腫には大光院の裏庭意味もなくうつて居ます。

忽ち白い何物かのひらめきが彼女の瞳を射ました。彼女の手は我知らずに動いて小銃の臺はその胸にあてられました。續いて轟然たる音響の夕暮の山の沈黙を破りました同時に白いものかハタリと地に落ちました。彼女はそれと氣がついた時にはすでにおそかつたので彼女は將軍御手放の鶴を射てしまひましたのでございます。銀銃を聞いて幕府の役人はかけつけました彼女はもはや逃れる道はありません。

けれども石子詰の刑に死んでしまつたら後に残る病んだ母をどうしよう。彼女は一目散に大光院の本堂へ走りました。丁度觀經中の吞龍上人は此有様に驚かれましたが仔細を聞くとすぐ彼女をかぐまはれました。後ればせに來た監吏が駈けつけた時には彼女の姿は本堂のごこにも見當りませんでした。幾度問うても上人は知らぬと答へられる現在逃げこんだ後姿をみとめて居ても禁入地であれば致し方もありません。かくまうたといふ證據が舉げれば上人の地位にも關するといつても上人がたゞ知らぬと答へられたのみであります。詮方なく彼等は遂に引取つて行きました。吞龍上人の

爲には幕吏何等の力をもふるひ得なかつたのであります。即日與一の母も温かい上人の手に救ひとられて大光院の奥ふかく安息の床に横たはるとが出來ましたけれども過去の心勞と衰弱とによつて老母は遂に歸らぬ人となりました。與一の妻はと見るとか弱い女心のはげしい動搖のために氣が亂れて「與一！與一！」と叫びつつ老母の臨終の床内傍にありなからもはや泣く事も笑ふ事も出來ぬ女でありました。

老母の死ぬと彼女は其の亡軀を抱いて本堂の横手に續く古池を回つて居りました。回りながら絶えず「私やネーエ」の歌を歌ひました。其聲は地の底から洩れて來るやうにひびきました。其夜彼女と老母の亡軀とが見えなくなりました。

翠朝蒼くさひた池の水の面に二つの死体が浮んで居ました。そして其の日から池にすむ蛙が與一與一と鳴きました。其の泣く聲は何となく悲しう御座いました寺の人達は懇に供養をして亡者の妄執を晴らさうとしました。けれども蛙は尚ほ日夜を営みなく與一與一と鳴きました生きて居ても死んで居ても與一の靈の再び金山に歸つて來るまで池の蛙は永劫に與一與一と鳴くことをやめぬらしく見えました。

吞龍上人は或自池に面した書房にお經を讀んで居られた時與一與一と鳴く蛙の聲があまりにいたましいので「そんなに鳴くな與一の靈魂は必ず此の池へよんでやるぞ」とおさゝやきになりました

それと同時に蛙は一齊に鳴く音をやめて其後は遂に與一ともギューとも鳴かなくなりましたそれから今に至るまで二百餘年此池の蛙はちつともなくことがなく今呼んで「鳴かずの池」といふのはこれでありませう。

第十二 人狼傳説と申しますのは嚴正な意味に於ては日本に果してあり得るものであるかどうかは疑問でございますが兎に角人間が或る條件の下に狼になるといふことを言つたものらしく又渡邊の綱の鬼女退治のものに類似したものが大分多くございまして此様なものが此名目の下に一括されてございませう。

第十三 英雄傳説とは英雄の出生に關するもので英雄とか鬼神を退治したお話でございませう。

第十四 妻争ひ傳説、これはよくおわかりでございませうか妻争ひの結果女子はいつも貞操を完うして美しい最後を遂げるやうになつて居ります。

第十五 船橋傳説、これは水を渡つて通ふ男女の一方が或る障礙のために最後を遂ぐるといふ内容の傳説で名目としては船橋傳説と申しますけれども必ずしも船橋を使用しませんでもよろしいので盟などでもかまはないのです。

第十六 神婚傳説と申しますのは人間以外の或るものとの交婚を説く傳説をすべて申します。

第十七 義犬塚傳説、これは義犬があつて或る仕事をするといふことが此名目のある大体の趣意

らしく見えますそして猿神を退治するといふやうな性質のものがおほくございませう。

第十八 縁起傳説これは一種の神話的傳説でありまして名目の性質上宗教土地などに關する縁起がおほくございませう。

第十九 民間信仰篇、一種の民間の信仰から或る事にそむいた結果罪を得るといふことを恐れ罰を受けんとするのを互に戒めるといふやうな一般民間にありふれた傳説であります。

第二十 人柱傳説、或者のために犠牲となるといふ根本で人身供養となり生理めにされたりします傳説で實際の事實としてあつたやうに思はれます。

第二十一 民間傳説篇、其の土地にありますお話で多くはくせのない愛嬌のあるお國自慢がおほう御座います。

第二十二 天然傳説、これは第一の名目にも屬するもので即ち植物の起源や形体の説明を目的として居る部分だけを第一の部分から獨立させて命名したものでございませう。

第二十三 準天然傳説、これは前と關聯したもので動植物起源をたゞ人又は人の靈魂に求めたといふことによつて前の名目から分離されたものであります。

大體只今述べました通りでございませうが此の分類された二十三を總括して考へて見ますと其間に共通點を見出すことが出來ませう。この共通點を二部に分ちます第一部は内容の方面より見たる分類で

之を分ちて四つと致します。

其の第一は偉人崇拜天才崇拜で今日私共が抱いて居りますこの思想は早くから祖先に抱かれて居たもので或る種のもの之から出たものと見ることが出来ます。第二は宗教心に基くもので稍迷信に近い形式で現はれて居ります。第三は教訓的のものであります。第四は或る傳説に就て見ますと祖先の思想の中には物質的に満足されるのを喜び其の様な事を理想した傾がございます。

第二部は形式の方面から見た分類であつて之を更に分ちて四つと致します。人間を用ゐましたり動植物即ち自然物を用ゐましたり超自然的のもの即ち神とか其他超自然的實在を探て來たり無生物を使たり致しました。

以上の分類を統一し更に考へまして傳説の研究を文學上から見ますと傳説は國民の趣味の自然の結晶で而も國民の心の底から出た聲歎かざる心の叫びでございます。結局自分たちの蹈んで居る世界から生活から生命から一步も離れず唱つた詩であり歌であり綴つた文であるのでございます。外行の誠に要心深い而も所有主の甚だ不明瞭なものではないのでございます。箇細工の様に自由な其の上自らも誤る事の多い冷い文字といふ媒介者によらず直接國民の胸から胸へ口から口へ息の通うて傳へられた温い文學で傳説は雨の目心からの友と温やかに物語る様ななつかしさゆかしさを持つて居ります。其の側から見ますと恰もグリムの傳説研究が獨逸文學に影響した様に外國の影響によ

らない此の土に生れた自然の作物が文學化される様な發達を見うるだらうと思ひます眞の國民文學といふものは恐らくは此の心から生じた思想感情の醇化された物ではなからうかと思ひます傳説は又教育と非常に密接な關係を持って居ります教育上に現れます時はお伽噺童話となつて居ります。

多くは擬人法の形で或る種類の教訓を面白く分り易く物語にしたものであります今日まで澤山お伽噺が出ましたが精しく考へると之から新らしい思想感情を新らしい方法を以て書き現はしたお伽噺が起つて來なければならぬと思ひます既に此の風潮が現はれて居りますが吾々は此の點から子供の心をよく理解した傳説作者が表はれて小さい國民の思想品性の陶冶の材料となるお伽噺が起る事を切望せずには居られません各地方の傳説を細かに調べましたら其土地の特色風俗習慣一般に抱かれました思想情意等が分つて面白い事だらうと思ひます文部省の文藝協會の一事業として各地方から傳説を蒐集されたのは此の意味を以て居るのであると思はれます今日傳説研究の漸々進歩せんとするのと同じ思潮のもとに動いて居るのでないかと思はれます要するに國民性の研究上この方面から資料を集めて大成せんと企畫されては居りますが未だ不十分な點がございます若し材料が完全に集まりましたら更に今後研究の歩を進めまして學理的に起原發達分布の様子を研究し他の科學との關係に及ばなければなりませんか誠に前途遼遠の事であります文學上教育上から考へて若しかう言ふ風潮が起て來ましたら是非これまでの傳説を研究し批評し更に新しい運動を起すといふ事が生じ



なければならぬと思ひます。

然るに在來の研究は以上の通りであり又材料が充分でないのであります。この理由により私共は此處に不完全な材料に基きましてこの不整頓な話をしましたのはこの研究の大成を熱望するからであります。切に皆様がこの研究に興味を持たれ此の研究上に貢獻せらるゝ事を希望いたします。

「日本人は如何してコンナ高尚な技術と趣味を心得て居るだらう。日本人は實に美術的國民である。かゝる美術的國民が何故にかゝる慘劇を敢てせんとするか。戦争などいふものは、ロシア人やトルコ人のやうに、戦争の好きな國民に一任して置けば好いに」ロシア人が云つたさうだが、これは味のある言葉と思ふ。露兵が日本兵の頭を刎れてやらうと勢こんで打つてよこした砲彈の生暖かき殻を拾つて草花をさして陣頭の伴侶とした將軍もあれば、血のやうに紅い撫子を胸に挿んで彈丸を撃つて居た勇士も日本軍隊にはあつた。春花の如き優しき情の内に、秋霜の如き凜々たる氣概を有するは日本人の特性ではないか？ 背囊に枕して蟲聲を聞き、銃火の中に立ちて、仰いて明月を賞するの士が、一度立つて怒號すれば獅子の狂ふが如きは、日本武士の態度ではないか？ 簡明直截、變骨の我等軍人も生死の間に在りて、なほ一片風流の雅懷を抱いて居る。——銃後

研究

◎シヨツベンハウエルの女子に就いての論文と、ラスキンの「セサム、アンド、リリス」中のリリス、オフ、クウインズ、ガーデンス」とを讀みて、兩者より提供せられし若干の問題を思ふ (承前)

賛助員 千葉安良

- (一) 兩性論の範圍に入るべき諸問題
- 2、男女の差異

嚴格に研究論證する場合には、此の男女の差異と云ふことは、(イ)男子と女子との精神的方面の差異と、(四)身体的方面の差異と、(ハ)その兩方面の總和よりする人生經營者としての差異とに分つて、生理學と心理學と教育學との部門内に行いてせられねばならぬのであるが兩氏

の論説はもとよりしかく學術的にせられて居るのではない。云はゞ此のハの部に入るべき思想が散見するのみである。それ故私も批評の客体の示す所に従つて思考して行くのである。

- (一) 女子の生涯は根本的に男子よりも幸なりとか不幸なりとか云ふことなく、男子の生涯よりもつと静かにもつとおとなしくまたもつと控へ目がちに流れて行くべきものである。
- (二) 性に關する事柄は個人に關する事柄よりもつと厳しく女子には、とり扱はれて居るこれは彼等の全存在と性格とに、或る輕躁な性質と、又男子とは全く異つた心の傾向とを與へる。